

[上総国分僧寺跡(市原市)]探訪レポート

前方が上総国分僧寺跡



「国指定史跡 上総国分寺跡」とある







中央に見える建物は近世の上総国分寺の薬師堂







薬師堂



七重塔跡





礎石が散在している





心礎



国指定史跡

上総国分寺跡

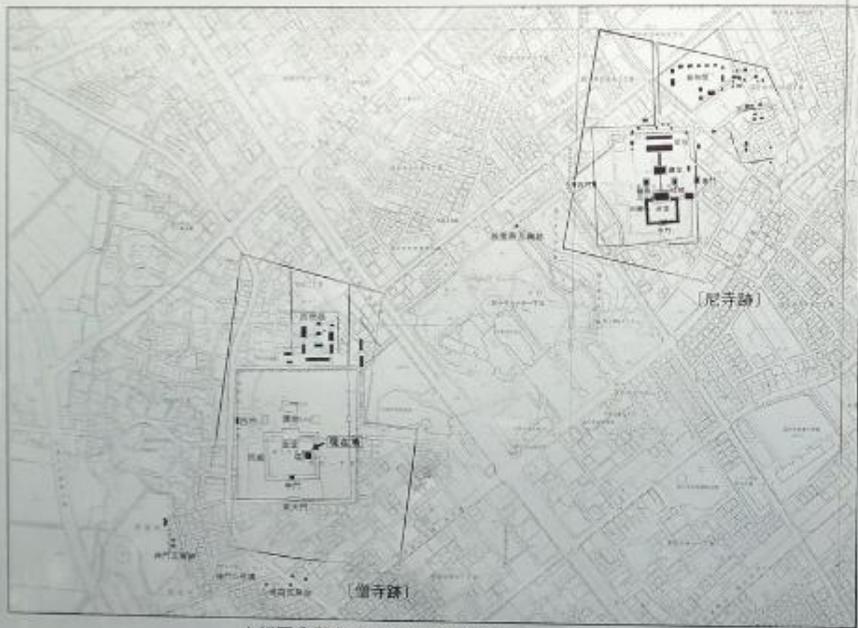
上総国分寺跡 昭和四十六年六月二十九日指定
上総国分尼寺跡 昭和五十八年八月三十日指定

国分寺は、天平十三年（七四一）聖武天皇の詔によって全国六〇余国に造営された僧寺（金光明四天王護国之寺）と尼寺（法華滅罪之寺）とからなる国立の寺院です。僧寺は釈迦如来、尼寺は阿弥陀如来を本尊とし、国家を護るための金光明最勝王経、大般若経、法華経の護国三法を根本經典としました。また、全国国分寺を統括する寺として、奈良東大寺・法華寺を総国分僧・尼寺とし、ここに律令国家の目指した日本全土を佛法に護られた地にするという仏教国家が完成しました。

しかし、国家の崇高な理想とはうらはらに造営事業は困難をきわめ、その完成には、民衆の労役と地方豪族の協力を得て、二〇年近くの歳月を要しました。

日本の歴史の中で最大の国家事業であった国分寺も、国を護る寺であるがゆえに民衆の支持が得られず、律令国家と運命をともしました。個人の救済を目的とした中世仏教は、こうした国家仏教の廃虚の中から次第に芽生えていきました。

市原市教育委員会



上総国分僧寺跡・尼寺跡配置図（縮尺2,500分の1）



上総国分寺七重塔復元図（縮尺300分の1）

僧寺（金光明四天王護国之寺）

藤原京の大宮大寺と同じ伽藍配置で、寺域は約13万㎡におよび全国国分寺の中で最大級の規模。20人の僧侶のほか、下働きをする多くの寺奴隷がいた。

尼寺（法華滅罪之寺）

10人の尼僧を擁し、塔をもたない。寺域約12万㎡の面積は奈良法華寺に匹敵し、全国国分尼寺の中で最大規模。寺を運営する上で必要な施設が確立されるなど、全国に先がけて全貌が明らかとなった。



「国指定史跡 上総国分寺跡」とある



中門跡付近か







以上、市民会館側から(東門)～七重塔跡～中門跡付近と見て来た/神門5号墳・神門瓦窯跡群・戸隠神社の表示もみえる



西側に廻ってみる



西門跡が表示されている

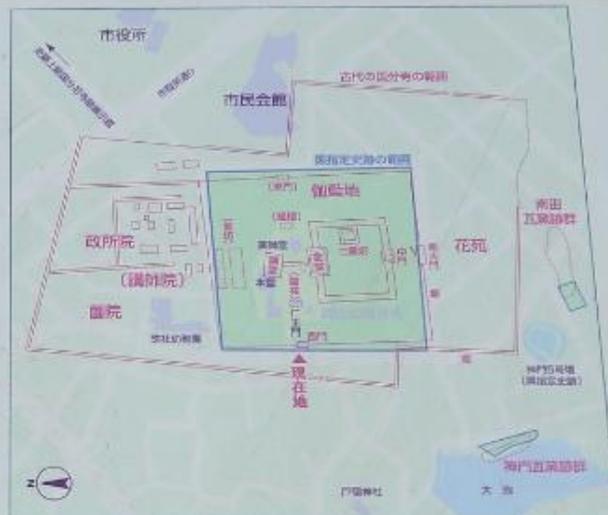


し せき かすのこくふんし おと
史跡上総国分寺跡

国指定史跡上総国分寺跡は、市原が古代上総国の政治・文化の中心であったことを象徴する歴史的文化遺産です。

上総国分寺(僧寺)は、寺域が13.9万㎡におよぶ、武蔵国、下野国に次ぐ規模を誇る代表的な国分寺でした。寺域のやや南西よりの南北219m、東西194mの範囲に塙をめぐらし、伽藍を配置していました。伽藍配置は、南大門・中門・金堂・講堂が南北に並び、七重塔は、回廊に囲まれた金堂前庭の東側に配置しているのが特色です。藤原京の大官大寺に類似しています。

伽藍地の北東には政所院(東院と呼ばれていた可能性があります)、北西には菴院、南には花苑などの付属施設が配置されていました。ほかに講院・綱所・経所・油菜所・厨などの施設が置かれていたことが、出土した墨書土器から推測されます。



史跡上総国分寺跡全体図

左を北にしています。

にし もん おと
西門跡

西門は、金堂と講堂のあいだの西方に位置し、伽藍地の西側の塙に開いていた門です。平成2年3月の発掘調査で間口3間10.8m(36尺、10+16+10)、奥行2間5.7m(19尺、9.5+9.5)の三間一戸の八脚門であったことが分かりました。

柱は直径約50cmの掘立柱で、一度建て替えられていました。また、西門が建てられる前に、南北5間12m、東西3間6.75mの掘立柱建物が建っていたことも分かりました。

西門跡については、平成5年度に位置や規模が分かるように整備しました。柱のあいだに甃を並べたところは、壁であったことを示しています。



西門跡発掘調査風景(南から)

人の立っているところが柱の位置。道路側にあと一列4本の柱が立つ。

柱のあいだに軒(せん)を並べたところは壁であったことを示すという





現上総国分寺



正面は仁王門

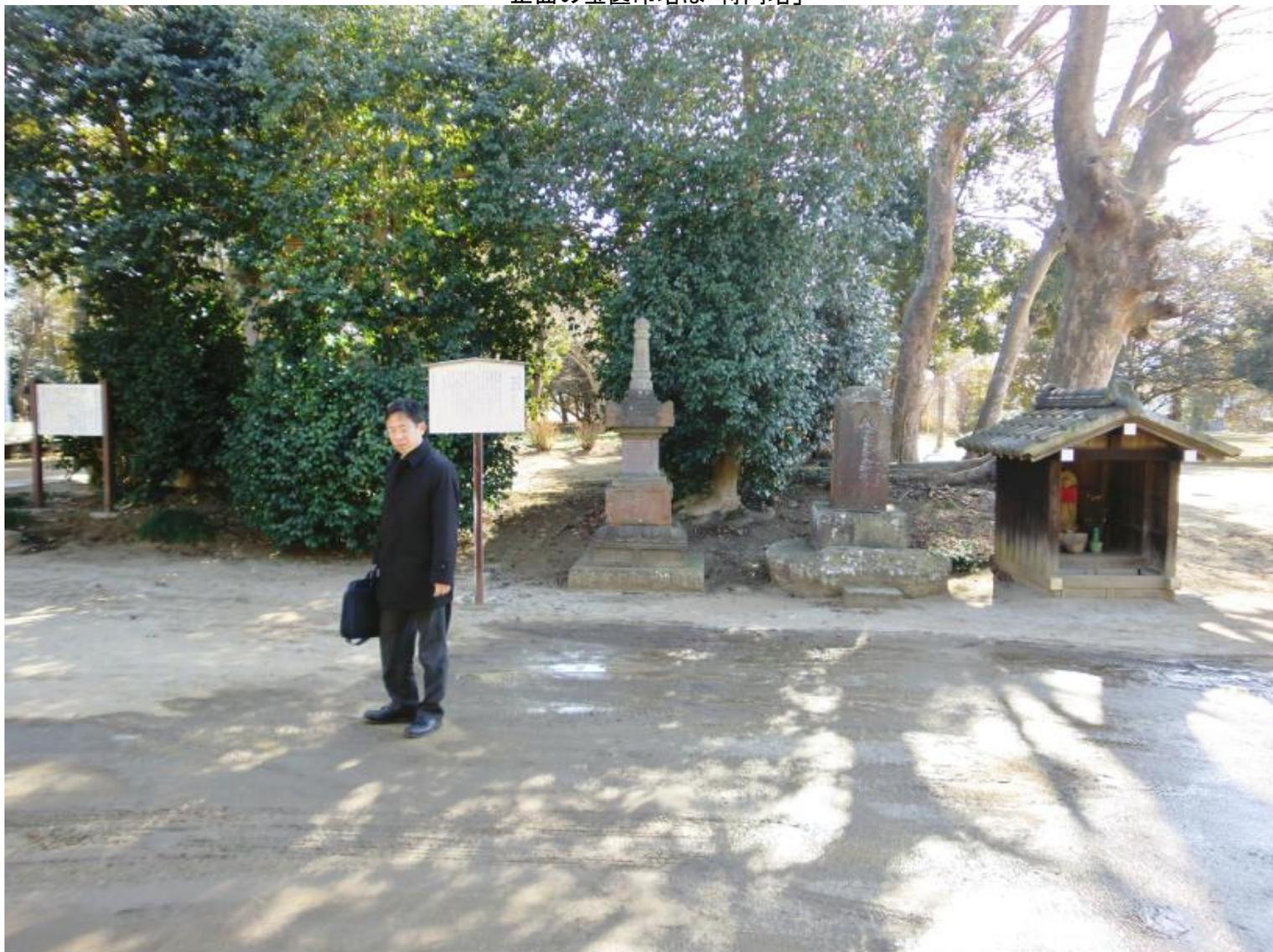








正面の宝篋印塔は「将門塔」





市指定文化財

将門塔まさかど とう（宝篋印塔ほうせきいんとう） 一基

昭和五三年三月十日指定

将門塔は、もと菊間新皇塚古墳の墳丘上に存在し、「将門の墓」として伝承されてきた。しかし、塔身には応安第五壬子十二月三日の銘が刻まれ、将門の命日、天慶三年二月一四日と違い、さらに塔の型式も南北朝時代と考えられ、将門と結びつく点はない。

石質は、凝灰岩で、総高約一・五〇メートル、基壇部の側面に二区の輪廓があり、複弁反花座は彫りが深い。その上の基礎表面には輪廓が二区存する。塔身は損耗が激しく、四面に種子を刻んだと思われるが、正面の「阿克」の梵字が判読出来るに過ぎない。隅飾りは、外側の直線が笠部の底辺に対して直立し、内側の弧線は二弧線となっている。相輪は紛失して無い。

昭和五十八年十一月

市原市教育委員会

文化財を大切にしましょう。

仁王門/江戸時代/かつての上総国分寺跡の鐘楼基壇跡に建つと考えられている



市原市指定文化財

木造金剛力士像（阿形） 附木造金剛力士像（吽形）

指 定 平成十八年八月二十八日

所在地 市原市惣社一七七一

金剛力士は仏法の守護神として、阿吽一對の二像が寺の門や須弥壇に安置され、二王（仁王）とも呼ばれました。本像は、西面して建つ国分寺仁王門の左右に安置されている一對の金剛力士像です。市内に現存する中世の金剛力士像は、皆吉にある橋禅寺の木造金剛力士像（千葉県指定文化財）と当阿形像のみです。

像高は、阿形が二・一四五メートル、吽形が二・二〇五メートルで、共に針葉樹材の寄木造りです。阿形像は、動きのある体勢と表情に迫力と重厚さを保ちつつも、鎌倉時代前期の金剛力士像に比べると筋肉や衣文の彫り方がおさえ目である点などから、一三世紀末頃から一四世紀前半にかかる頃の作とみられます。残念ながら頭部は江戸時代初期の補作ですが、本像は市内のみならず、房総の仏教彫刻史上重要な位置を占める秀作です。また中世の上総国分寺の歴史を考える上でもかけがえのない歴史資料です。

吽形像は、江戸時代後期（寛政十二年頃か）の作で、全体の彫り方の形骸化は免れませんが、その寄木構造は阿形像の特殊な造りにならっており、学術的にも貴重です。旧像にならう江戸時代の再興像として、阿形像と一揃いの二王像としての価値があり、附として一緒に指定いたしました。

なお本像は、平成十六年、寺と檀家有志の努力で復元修理され、当時の躍動感あふれる造形美がよみがえりました。

平成十九年三月三十日 市原市教育委員会

阿形像は鎌倉時代後期の作という/吽形像は江戸時代後期の作



鐘楼

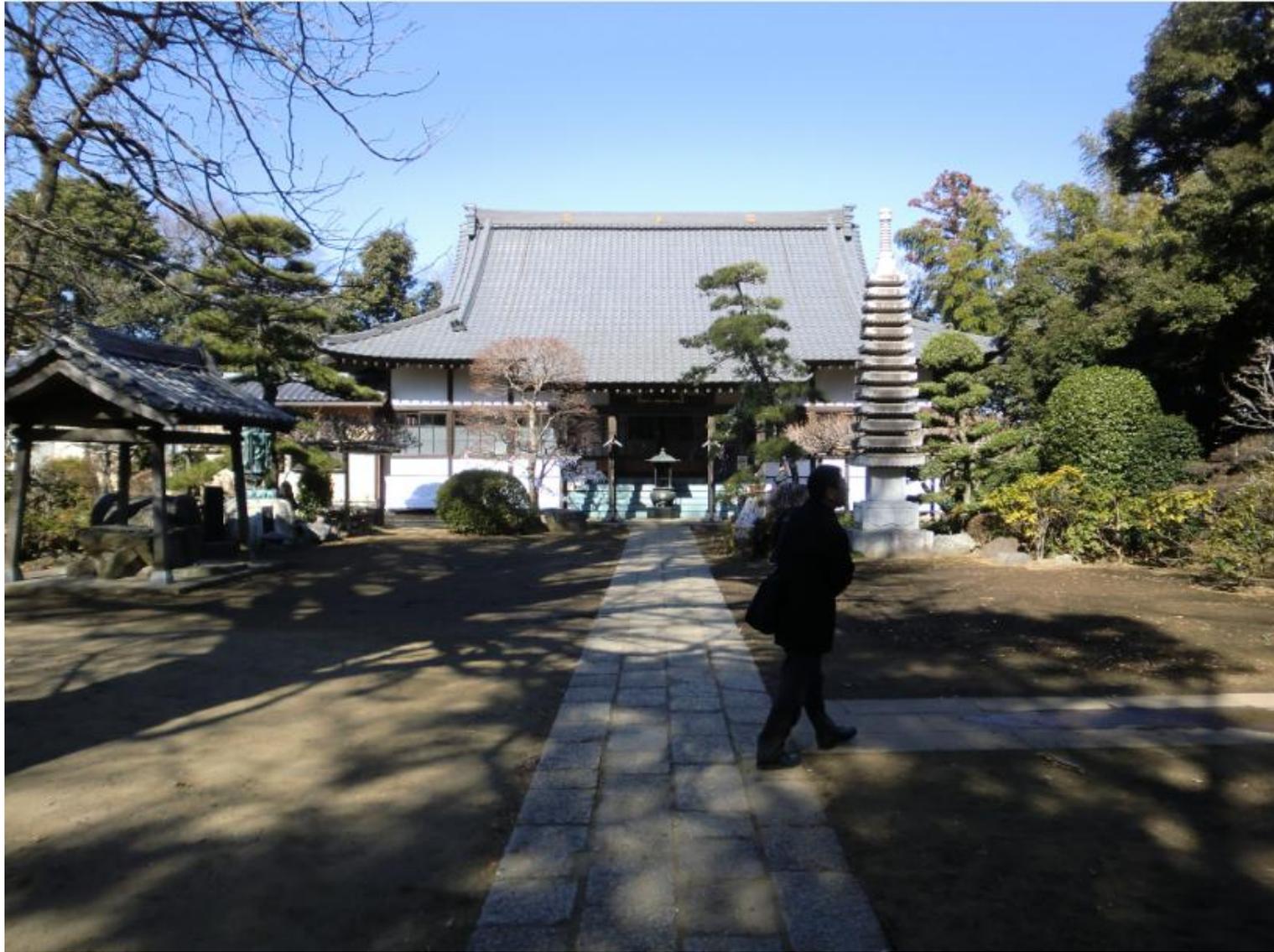




六地藏



本堂



薬師堂/1716年落成







市原市指定文化財

国分寺薬師堂附厨子

昭和六十二年三月一日指定

国分寺薬師堂は、桁行三間・梁間三間のいわゆる三間堂といわれる形式で、正面に一間の向拝（庇）が設けられています。また、周囲には、高欄を付ける切目縁がめぐります。屋根は、茅葺の入母屋造で、建物内部には、内陣天井に植物文様の絵、外陣に竜及び飛天が描かれています。

また、内陣の須弥壇に置かれた厨子は、手の込んだ唐様に作られ、金・朱・緑の彩色が施されています。

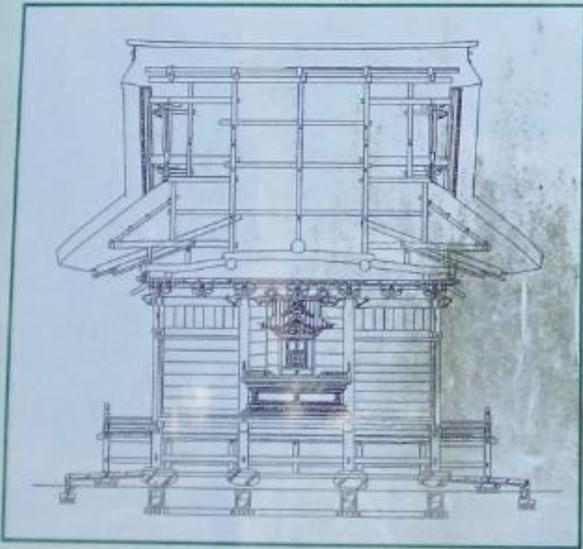
清浄院国分寺に伝わる縁起によれば、元禄年中、当地に移り住んだ僧・快應が寺の荒廃を憂い、一念発起して、建立の計画を立て、浄財を募るなど、再建に向けて尽力したことが知られていました。が、平成三年の薬師堂解体修理の際、建築部材の一部から、快應の名をしるした墨書が発見され、縁起の信憑性の高いことが、裏付けられました。

また、建築に携わった大工などの名前や出身地名などの墨書も見られ、建築は、惣社村の大工小三郎や有吉村（現千葉市）の伝三郎、五井村の半三郎など、彫刻等は、飯櫃村（現芝山町）の秋葉大治右衛門為久、牛熊村（現横芝光町）の松岡貞右衛門常久等の工匠により行なわれ、享保元年（一七二六）に完成したことが分かりました。

市原市教育委員会



天井絵 飛天(羯鼓)



国分寺薬師堂(桁行断面図)



















般若堂





手水屋





「史跡 上総国分寺跡」とある







さまざまな石造物



金堂跡とある





薬師堂天井画「羯鼓を奏する飛天」



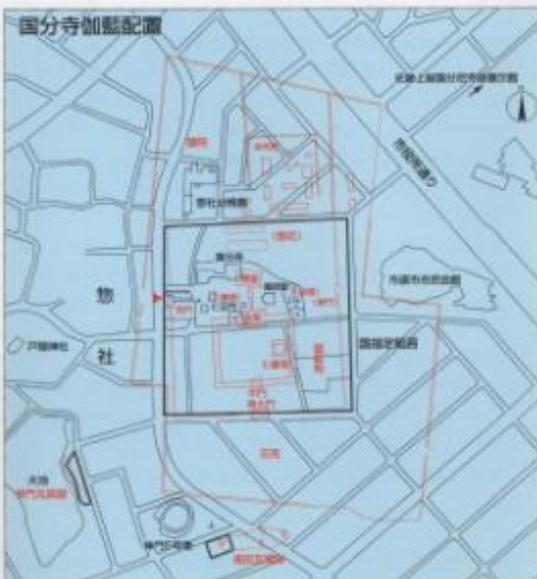
薬師堂厨子(市指定文化財)



将門塔(市指定文化財)



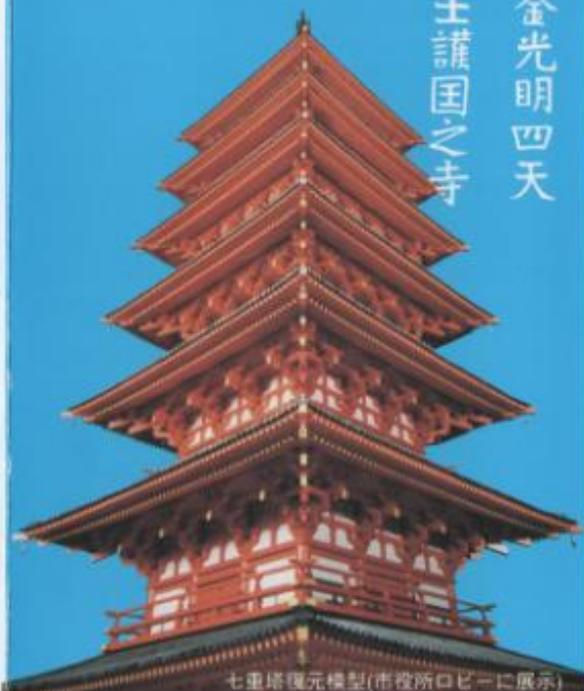
国分寺薬師堂市指定文化財



交通 / 船山の電車通市駅インターチェンジから車で5分、2日内川橋五井駅より
 小津鉄道バス市役所行にて「国分寺入口」・「赤坂所」下車、徒歩5分。
 問い合わせ先 / 市教育委員会ふるさと文化課 ☎ 0436-22-1111(代)
 〒290-8501 市原市国分寺台中央1-1-1
 国分寺 ☎ 0436-21-0734 ☎ 290-9023 市原市惣社1-7-23

天平のランドマークタワー 国分寺七重塔

金光明四天
王護国之寺



七重塔復元模型(市役所ロビーに展示)

国指定史跡
上総国分寺跡

国分寺の建立

国分寺は、今から千二百五十年ほど前、聖武天皇の詔によって、国の平和と繁栄を祈るために全国六十ヶ所余りに建てられた僧寺と尼寺からなる国立寺院で、地方の仏教や文化の中心となりました。上総国分寺は、その中でも規模が大きく、伽藍も良く整った代表的な国分寺といわれています。

国分寺の建立は、天平時代の社会不安や政局の混乱を、仏教の力で鎮め、人心の統一を図ろうとしたもので、「金光明最勝王経」の教えに基づく僧寺と「妙法蓮華経」に基づく尼寺を国ごとに置きました。「金光明最勝王経」は、この経を敬い、国土に読み広める王があれば、四天王が常に来て守護し、災いを除いて至福をもたらすと説いています。この教えに基づく僧寺を「金光明四天王護国寺」と称しました。

上総国分寺の寺域は、北東と南西で谷や古墳を避けているため四角形ではなく、南北478m、東西が北辺で254m、中央で345m、南辺で299mを測り、面積は13.9万㎡におよび、武蔵・下野の国分寺に次ぐ大きさです。いわゆる七堂伽藍と呼ばれる主要な堂塔を配置した伽藍地は、南北219m・東西194mで、ほぼこの地域が国指定史跡として保存されています。

主要伽藍の周りには、堀を巡らし、南と東西には門が開いていました。伽藍配置は、南大門、中門、金堂、講堂が南北に並び、回廊に囲まれた金堂前庭の東に七重塔を配するのが特色です。藤原京の大宮大寺に類似する伽藍です。詔に「造塔の寺は国の華」とうたわれているように、七重塔は国分寺を象徴する最大の建造物でした。

主要伽藍地の北東には政所院(東院)、北西には園院、南には花苑などの付属施設が配置されていました。ほかに経所、講院、経所、講院などの施設があったことが、墨書土器の出土によってうかがえます。

現代の国分寺

古代の国分寺跡の中心部には、医王山清浄院国分寺が現在も法燈を伝えています。本尊の薬師如来を祀る薬師堂は、江戸時代の中頃、正徳六年(1716年)に書かれた国分寺「再造之縁起」によると、僧侶「快庵」によって再建されたものです。

薬師堂は、桁行三間・梁間三間のいわゆる三間堂といわれる形式で、正面に一間の向拝(庇)が設けられ、屋根は茅葺きの入母屋造で、内部は格子戸によって内陣と外陣に分けられています。内陣中央間の天井は、角材を格子に組んで板を張った格天井で

極彩色の文様が配されています。外陣中央間の天井には、登り下り一對の龍が、脇間の天井に大皮・笙・横笛・羯鼓を奏する極彩色の飛天がそれぞれ描かれています。また、内陣の須弥壇に置かれた厨子は建物より一段と格調が高く、手の込んだ唐様で作られ、厨子正面扉には内陣極彩色の登り下り龍が、須弥壇うしろの束装壁にも繊細な筆致で、飛雲と蓮華が金箔・朱・緑などの極彩色で描かれています。

建築部材に書かれた墨書の中には、快庵以外にも、地元惣社村の木工棟梁の小三郎など地元職人の他に、飯橋村(芝山町)や牛籠村(横芝町)の遠方の職人の名も見られ、11人の職人が携わったことが分かっています。

国分寺西正面の仁王門は、建築様式から江戸時代中頃の十八世紀の建立と考えられます。正面両脇の金剛輪の中には、右側に阿形・左側に吽形の仁王像が安置され、特長から吽形像は江戸時代に、阿形像は南北朝時代の作と考えられています。

この仁王門の手前右側に「経門塔」と伝えられる、「延安第五壬子十二月三日」(1372年)の銘文を刻む宝篋印塔があります。もとは菊間字北野に所在した観音塚古墳の隣接地にありました。塔身や相輪は復元したもので、石質は凝灰岩、総高2.45mを測ります。

市京市では、この上総国分寺跡と尼寺跡の史跡整備を行っています。尼寺の整備では、中門や回廊の古代建築物や金堂基礎を復元し、史跡内には国分寺を分かりやすく解説した展示館が開館しています。国分寺では西門跡の基礎整備(平成5年度完成)を行い、今後は引き続き全体の整備を進めて行く予定です。



国分寺跡、尼寺跡出土の灰釉陶器など



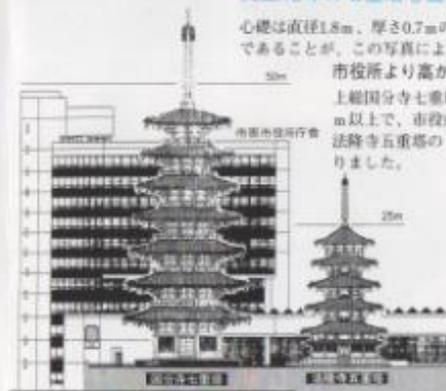
上総国分寺跡元模型(千葉県立中央博物館所蔵)



大正13年の七重塔心礎

心礎は直径1.8m、厚さ0.7mの敷内円錐形であることが、この写真によってわかる。

市役所より高かった七重塔
上総国分寺七重塔は高さか40m以上で、市役所より高く、法隆寺五重塔の2倍近くもありました。





今なお健在！ 国分寺の守護神

あうん

阿吽の金剛力士像





■ 中世の上総国分寺を今に伝えて

山門で一对の金剛力士像が目を光らせ出迎えます。いわゆる仁王さまです。右に口をカッと開けた阿形像、左に口をギュッと結び睨みをきかせる吽形像。互いに気迫をみなぎらせ、一步も引かずに国分寺を守ります。

中世に再興した上総国分寺と現代とをつなぐ数少ない架け橋のひとつが、この仁王像です。発掘調査で中世居館の痕跡が認められたことや、古文書にわずかな記載が残ることから (p.19 参照)、中世の国分寺の存在は明らかでしょう。そして、この像はそのことを今に伝えるいわば生き証人と言えます。

阿形像は 13 世紀後半、鎌倉時代後期の作です。優れた造形美で仁王の迫力を生み出します。相対する吽形像

は江戸時代後期の寛政 12 年 (1800) の造像です。一見して造形の雰囲気の違いもみてとれることでしょう (次頁参照)。このように、その制作年代には 500 年以上という大きな開きがありますが、実はしっかりとつながりがありました。

■ まさしく阿吽の呼吸

吽形像の造像から 200 年余りの時を経て、2004 年、解体修理が行われました。その修理で、2 体の像はほぼ同じ構造で作られていることがわかったのです。

鎌倉時代後期に作られた阿形像は、当時の主流であった寄木造りで作られています。しかしそのパーツの寄せ方はかなり特殊なものでした。多数の木材を組み合わせ、像の両脚のみで支えて立つわけですから、本来は、脚か



吽形



阿形



阿形



吽形

ら胴体にかけてのしっかりとした芯となり得る根幹材こんかんざいを元に、周辺の腕や衣を付けて組んでいく方法が基本となります。しかしこの像は、そのような根幹部分までも木材を分け、前後上下に巧みに組み合わせるといった細工的な木寄せ方法によって組まれていたのです。

阿形像の頭部分は江戸時代初期に作り直されていたものですが、その造形にも特徴がみられます。通常の金剛力士像は髪の生え際をあらわさないものですが、この像はまるく彫り出されているのです。

このようなユニークさをもって作られた阿形像に、吽形像は、その構造も髪部分の特徴もなっているのです。

各像の台座の内側から、「寛政十二年八月」の墨書がみつかりました。吽形像はこの台座とともに作られたようです。この時、共に阿形像も解体修理がなされたことでしょう。そして仏師がじっくりと観察し、そして先達への敬意も込めて、新造する吽形像の作りを阿形像にならせたのでしょう。

山門に立ち続け、容赦ない風雨にさらされる金剛力士像。痛みやすいが故に、中世までさかのぼる古い像は多くはありません。市内では皆吉みなよしの橋禅寺きつぜんじ像と合わせて2例のみとなり、県内をみても希少な存在です。そんな厳しい環境を経て、中世から江戸へ、そして現代へ。連綿と続く篤い信仰が、今も国分寺に息づいて、守り守られ続けているのです。

左上 像の正面 右の阿形像は、筋骨隆々な彫り方やその姿勢から気迫を伺わせる。左の吽形像は、どっしりとした迫力はあるものの、ややコミカルな雰囲気を出す。胸の筋肉は形式的なラインであらわされ、手や足も丸みを帯び、それはまるでミッキーマウスの手ての平を思い出させ親しみを覚える。これは、鎌倉時代と江戸時代において仏の彫像に向き合う仏師の心意気や技量の差の表れとも言える。ふたつの時代をよく反映していると思っ拜すると、より興味深く比較し観察することができる。

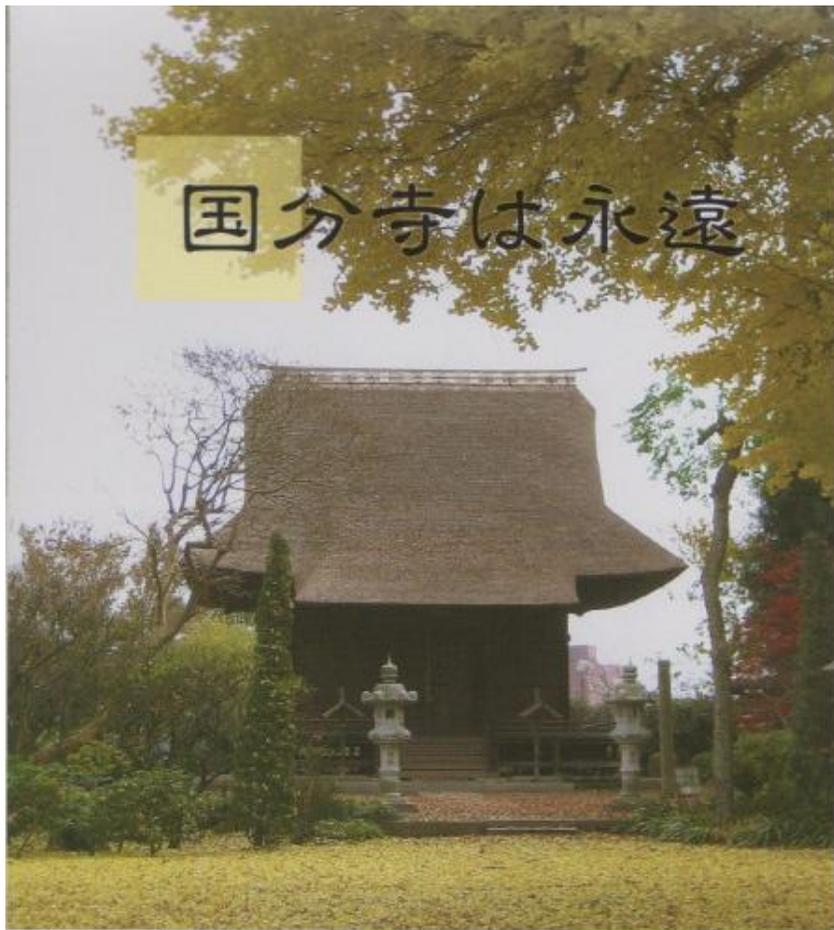
右上 像の背面 寺の山門ではなかなか見えづらい後ろ姿だが、腰からなびく裾くす(くん)の様をくらべてみよう。

(上4枚、解体修理時に仏師石井幹男氏撮影の画像を一部改変)

下 仁王門 江戸時代の建築。門の立つ場所は土壇状になっている。その位置的にみて、かつての上総国分寺跡の鐘楼(しょうろう)基壇跡であろうと考えられている。門の向こう側に萱葺屋根の三間堂、国分寺薬師堂がみえる(1716年築造)。12月初旬には大銀杏が美しい。



国分寺は永遠



最後の復興 地域の寺に

■ 村に根ざした寺

付属施設と思われる方形館の廃絶は、伽藍本体の衰退も意味します。もともと現在残る鎌倉期の金剛力士像が、



左 国分寺薬師堂（市指定文化財） 近世に再興された上総国分寺の本堂で、薬師仏を本尊とする。南向きの古代伽藍とちがひ、西を向いている。平成2年、上屋を東側に移築した際の調査で、建物基壇の下層から宝永4年(1707)に噴火した富士山の火山灰が確認された。建築部材には墨書銘があり、正徳6年(1716)に落成したことがわかる。堂の天井には、狩野派(かのうは)の仏画師による飛天と龍二頭が描かれており、正月に公開されている。

上 790号梵鐘鑄造遺構 旧寺院地の東部で、近世の梵鐘鑄造遺構が発見された。元祿から正徳期にかけての国分寺復興の際に造られたものであろう。梵鐘などの大型製品は、鑄物師(いもじ)が遠方から出張し、発注者の近所で鑄したことがわかる。

下 1828号地鎮遺構 薬師堂の基壇中央には正方形の小穴が掘られていた。地鎮行為の跡で、穴底に5本の木棒を並べ、上にカワラケ7枚と寛永通寶13枚を置き、埋めたものである。実年代が絞れるため、カワラケ研究の良好資料である。

最初から国分寺の仏像として伝来したのであれば、中世以来少なくとも一部の堂宇は維持されていたことになり
ます。しかし国分寺の伝承では、平将門の乱の兵火で
法灯が断絶し、江戸時代によく復興したと云われて
いるくらいですから、著しく衰退した時期が続いたこと
は確かなようです。

元禄期(17世紀末)になると、真言宗の僧快応の
勸進により、国分寺の復興が始まります。

旧寺院地の東南部では、大穴を掘って梵鐘を鋳造した
跡が発見されています(右上写真)。国分寺復興時の遺
構として貴重ですが、ここで鋳された梵鐘は残念ながら
残っていません。

復興事業はしばらく続いたようです。主要建物は
正徳6年(1716)をもって完成したことが、薬師堂の
部材の墨書から確認されています。

さて、現在の境内を訪れてみましょう。瓦葺きの本堂
の南東に、茅葺きの大きな薬師堂があります(上写真)。
江戸時代はこの建物が本堂でした。建物の中心軸を西に
追うと仁王門がありますので、寺自体が西を向いてい
たことがわかります。この仁王門は、古代B期伽藍の
鐘楼(あるいは経楼)の推定位置にぴったり重なること
から、古代の基壇を再利用したものと考えられています。

近世の復興国分寺は「医王山清浄院国分寺」と称し、
隣村の村上村にある観音寺の末寺とされ、真言宗豊山派

として現在の国分寺につながっています。

江戸時代は寺請制度が整備された時代です。村の寺院
は地域の人々を檀家とし、教導を行うようになりました。
復興後の国分寺も、葬儀などの行事を中心に、惣社村の
人々の生活に深く関わってきました。

中世の国分寺は国衙支配と密接な関係の下に整備さ
れ、その衰退と運命を共にしていきました。しかし江戸
時代の復興国分寺は、地域社会に根ざした人々のための
寺院として生まれかわったのです。

